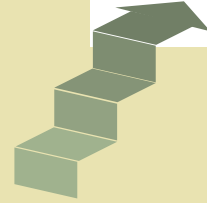


ながのぜき 長野堰

染色のまち高崎に流れる



千年の伝説、歴代高崎藩主が引き継いだ水路

●高崎城下と領内を潤す16km水路

高崎の中心市街地の北を流れる用水路「長野堰」は、武田信玄の進行を防いだ箕輪城主・長野業政が16世紀初頭に開削したことから、その名を名付けられたという。しかし、伝説によれば実は平安時代に長政の先祖、上野国守・長野康業がもともと開いた用水で、千年の歴史を持つとも言われている。

長野堰は、榛名山のすそ野、箕輪城にも近い高崎市本郷町の烏川から取水された田園地帯から市街地へ至る用水で、岩鼻町で再び烏川に合流している（烏川は利根川の支流）。

長野氏が開いた長野堰は現在よりもはるかに小規模と考えられ、水路の延長は1598年（慶長3年）に箕輪から高崎へ城を移した初代高崎城主・井伊直政が進めた。水路事業は歴代城主によってその後も引き継がれ、現在の水筋が徐々に整えられていった。総延長16kmに及ぶと、高崎藩領のほぼ全域約1,700ヘクタールを潤すことができた。現在でも取水口は壮観で、豊かな水

量が流れている。江戸時代は、西新波堰、もしくは大川と呼ばれた。高崎藩以前の武将の名が付く「長野堰」の呼び方は、その頃の城主には面白くなかったのかもしれない。

●榛名湖から取水を計画した輝貞公

長野堰の水は高崎城下に引かれ、お城や城下町の用水に使われた。領内の新田開発が進むと、水量が足りなくなり対策が迫られた。元禄時代の城主・大河内右京大夫輝貞公は、長野堰の改良に熱心で、榛名山にトンネルを掘って、榛名湖から水を引く計画に着手した。ところが吾妻側から猛反対を受けた。幕府の判断で工事は中止になってしまった。榛名湖南の摺臼岩下には、掘りかけのトンネルが今も残っており、「右京濠」と言われるが、「右京のただ濠」「右京の泣き濠」など、ずいぶんな呼ばれ方もされている。それから200年後の明治37年、ようやく榛名湖からの取水工事は実現された。

●高崎の染物を支え育てた長野堰

井伊直政は箕輪城から高崎城へ城下町も移し、高崎城下に染め職人の集ま

る紺屋の町が誕生した。高崎の染物は江戸時代からの歴史があり、西上州一帯から集まる高崎絹を染め、「高崎にあれば染物の仕事が間に合う」とまで言われたそうだ。染物職人の多くは、長野堰とそこから城下に引いた支流の水を利用した。旧市の北部には、戦後に至るまで長野堰に沿って多くの染工場があり、染物の洗い場が長野堰に張り出していた。護岸は石積みで長野堰の川流しは、昭和20年代まで盛んに見られた風景である。

長野堰の水利権は高崎藩や村同士の話し合いでルールが作られていたが、日照りになると水争いが起こり、時には凄惨な状況にも発展した。長野堰の支流には「地獄堰」と名付けられた用水があり、水争いの激しさが伝わってくる。水利の問題は明治以降も続き、昭和37年に地獄堰を含む4つの用水に平等に湧き上がる「円筒分水」が、高崎市立城東小学校の近く（高崎市江木町）に設けられた。サイフォンの原理で水が湧き上がる円筒分水は、全国でも珍しい施設で、水の流れも美しく、農林水産省の「疏水100選」に選ばれている。